

· 結論

以上、本論5章28節における考察によって、本研究の課題は達せられたものと考えるが、各章で得られた知見を総括的にまとめて結論とする。

(1)ジャワのヒンドゥー教（シヴァ教）寺院の非対称伽藍においては、正方形ないし矩形の囲繞壁によって取り囲まれた伽藍の中央に、原則としてシヴァを祀る主祠堂が西ないし東面して配置され、またそれに正対して三基の副祠堂が配置される。一見して左右対称の伽藍構成が遵守されているように見えるものの、実際には祠堂群全体が、南北方向へずれていることが確認された。また既往の研究では、主に個別の事例において、祠堂群の「ずれ」が北側になることが確認されていたのに対し、筆者は類例を網羅して検討を行い、その結果、祠堂群の「ずれ」は全体として北側になる傾向の認められることが改めて確認された。また、寺院敷地の中心点と、主祠堂の正面階段翼壁（ないし正面突出部の側壁）と基壇の交差する隅の部分とが、概ね一致する傾向の認められることも確認された。さらにその敷地中心点にリング状立石、十文字刻線の印された特殊な切石、台座状の切石、チャンディのミニチュア（小塔）の置かれる事例が四例認められたことにより、寺院敷地の中心点が、何らかの理由で特別視されていることは明らかと判断された。

以上の諸点に鑑みれば、祠堂群の「ずれ」が意図的な「ずらし」であることを疑う根拠は特に見出せず、また特別視された寺院敷地の中心点を避けるべく、祠堂群全体がずらされていると見る既往の論説は是認され得る。

そして、祠堂群が北側へずらされる一方で、囲繞壁の正面の開口部は南側へずらされる事例が多い。また寺院の敷地中心点だけではなく、四方四維に位置する地点にも、リング状の立石、台座状の切石、チャンディのミニチュアの置かれる事例が八例認められるなど、敷地中心点が特別視されると同時に、四方四維に位置する地点も併せて重要な地点として聖別されているものと判断される。

こうした非対称の伽藍構成を有するヒンドゥー教寺院は、中部ジャワ南部から東部ジャワにかけて広範囲に分布し、さらにその推定建立年次は、8世紀の前半から13世紀の末までの長きにわたる。考察の対象として挙げた遺構は10例に留まるが、それらが現存する主要なヒンドゥー教寺院の殆どを占めていることにより、上述の非対称伽藍は、ジャワのヒンドゥー教寺院における伽藍型式の一典型として、中部ジャワ期から東部ジャワ期（シンガサリ王朝期）に至るまで一定の拘束力を持ち続けていたと考えられる。

(2)ディエン高原のチャンディ・アルジョノに代表される中部ジャワ北部山間地のヒンドゥー教（シヴァ教）の遺構群が、祠堂の建築構成、細部意匠、尊像構成などの面で、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院の祖型と見るに相応しい特徴を顕著に備えている点については既往の説が述べる通りである。これらの古式を残すとされるシヴァ教寺院に見るモルディングおよび基壇の型式が、発達南下して中部ジャワ南部に新たな展開を見せた結果、遅くともチャンディ・グヌン・ウキルが造営されたと見られる732年頃までに、半円縁形を有するモルディング構成、また浮彫りや縁形を一切持たない「平滑型」の基壇といった新様式が成立し、またそれに伴って非対称の伽藍構成が中部ジャワ南部の地に成立するに至ったものと考えられる。

(3)既往の研究では、インドのヴァーストゥ・プルシャ・マンダラの観念における、「マルマン」（急所）の規定と非対称伽藍との関連が指摘されており、すなわち非対称伽藍を有する寺院の敷地中心点にしても、土地の精霊ヴァーストゥ・プルシャの身体上の脆弱な急所と見なされた上で、その地点を避けるべく主祠堂を中央からずらして配置されるものと解釈されている。これに加え、チョーラ朝期にその原型が成立していたとされ、他の類似のヴァーストゥ・シャー

ストラ文献にも大きな影響を与えた最重要文献と位置付けられているのが『マヤマタ』であるが、そこに記述されたマンダラを基本とするグリッドに勧請された諸神の配置と、チャンディ・ロロ・ジョングラン内苑に配せられた諸神の配置とに、一定の共通する規則性を認められる点などは、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに類する神観念が、ジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になると考えられる。

またインドの関連文献において、「中心の区画」、「中心線」、「中心点」として表される急所、ないし避けられるべき箇所として位置付けられる空間上の「中心」は、ブラフマーないしブラフマンと関連付けられている。既に指摘されているように、マンダラの中央の区画がブラフマスターナ(ブラフマーの座所)と呼ばれる所以は、その区画が、古代インド思想における始源的な原理であり、大宇宙の中心とされる「梵」(ブラフマン)の観念に通底することにあると考えられる。非人格的な中性原理である「梵」が人格化されて生まれた創造神ブラフマーは、宇宙の源泉を象徴する重要な神格として宇宙の縮図たるマンダラの中央神格とされ、またその故にブラフマーの占める領域の内外の各地点は、ヴァーストゥ・プルシャの身体上の急所と対応する形で、避けられるべき重要な「マルマン」(急所)として認識される一面であろう。したがってジャワのヒンドゥー教寺院においても、聖別され、そして意図的に避けられた敷地中心点に、「梵」の概念が表象されているとも見なし得る。

しかし一方で、インドの神観念の影響とは別の文脈、すなわちジャワからバリ・ヒンドゥーへの継承的な発展という文脈の中で、避けられた「中心」の意味を考究することも可能である。ジャワのヒンドゥー諸寺院の敷地の中心点、そして八方位に位置する地点に置かれたリング状の立石を、先に記した「梵」(ブラフマン)の観念とは別に、そのまま素直にシヴァないしその別神格と見れば、中部ジャワで最も完成度の高いシヴァ教寺院であるチャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍は、シヴァの別神格八神によって中央神格のシヴァが、さらにはヒンドゥー教の三大神が取り囲まれる図像的空間として理解することが出来る。換言すれば、シヴァの別神格八神によって三大神が取り囲まれる図像として構想された大宇宙の縮図が基本的観念として存在し、その図像的空間を寺院の伽藍配置にとりこむという宗教的理念の下に、同寺院が造営されたものと考えられる。そして特筆されるのは、この図像がバリ島の儀礼象徴として重要視されているナワ・サンガの観念に符号する点である。つまりジャワにおいては、インドの「梵」の観念に連関して急所として避けられた寺院敷地の「中心」に、重合的にシヴァ神を立てて象徴的な宇宙の中心を表象し、なおかつそれをリングの形象をもって明快に顯示しているものと推察される。

- (4)ジャワ島及びバリ島には、ヒンドゥー教世界の各方位を司る神々の観念、すなわち宇宙論的な秩序の下に、ある特定の神が一定の方角と関係を有するという「方位神」の思想が存在する。既往の研究では、ジャワ島外のヒンドゥー文化、たとえばインドやネパールなどに「方位神」の観念の着想が求められていた。インドからの一定の影響は当然有ることが想定され得るにしても、筆者はむしろ、バリと最も蜜実な関係を有していたことの明らかな古代ジャワのヒンドゥー教及び仏教の方位及び神格の分析を通じ、バリのナワ・サンガの観念が、古代ジャワにおける「方位神」の体系の発展系列の延長上に位置付けられるという新たな説の提示を試みた次第である。まず、中央に座すシヴァの北・南側にヴィシュヌ及び・ブラフマーを配する「三神の体系」に、ジャワ仏教の尊格配置の影響を受けながら、東西を司るシヴァの別神格である二神が加わり「五神の体系」へと展開し、さらに四維に同じく四柱のシヴァの別神格が加わり「九神の体系」を成し、より一層組織的な「方位神」の体系がジャワで成立するに至り、それがナワ・サンガの観念へそのまま継承されていると考えられる。

ナワ・サンガの観念とロロ・ジョングランの伽藍に見るヒンドゥー教図像に、類縁性が認

められることは述べた通りであるが、しかしそれだけに留まらず、中部ジャワ期から連綿と継承される神格配置の発展系列の中に各々を位置付けることが出来る。

- (5) 中部ジャワの重要な仏教チャンディであるボロブドゥール、チャンディ・セウ、チャンディ・ルンブン、そしてチャンディ・プラオサン・ロルの四遺構の伽藍構成に関して言えば、左右の、あるいは四方の対称性が強く意識されていると見られ、少なくともヒンドゥー教の諸寺院に認められるような、寺院敷地の中心点の直上を避けて祠堂群をずらす、あるいは中軸線を避けて開口部を設けるなどの明確な意図性を伺わせる「ずらし」は認められない。むしろ仏教遺構の対称的な伽藍は、ジャワにおける仏教の思想と、それに伴う尊格の構成原理と密接に関連するものであると考えられ、伽藍を左右ないし四方対称とすることには必然性を認め得る。

つまり裏を返せば、左右対称を基本としつつも、寺院敷地の中心点を避けるべく、祠堂群をずらして造られる非対称の伽藍は、ジャワにおいてはヒンドゥー教の諸遺構に固有の配置形式であると推察される。荒廃著しいジャワのチャンディの中であって、わずか四例ではあるが、極めて重要な仏教遺構の諸伽藍において、左右ないし四方の対称性が重んじられていることを考慮すれば、上記の見方は首肯され得ると考える。そしてその見解は、先に追究した論点、すなわちヒンドゥー教の諸寺院における非対称の伽藍構成に、ヒンドゥーのマンダラの観念が反映されているという解釈を側面から傍証するものであると言えるだろう。